



小栗外傳

二

~13
3919
2



門へ13
號3919
卷2

夜話 小栗外傳卷之二

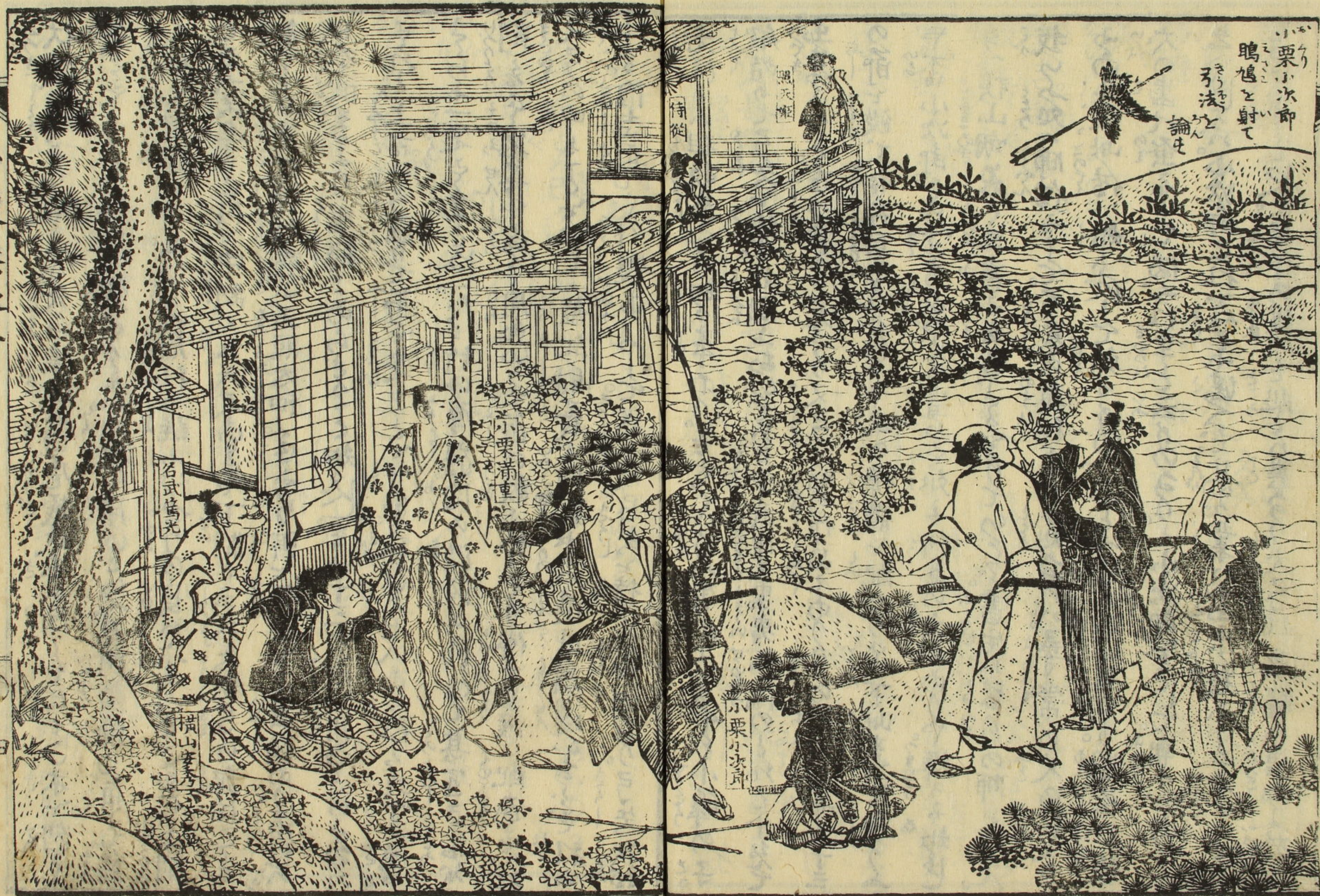


第三編

東都 絳山歌醜陳人戲編

鳴鳩と射て小羊唇を物と
鮎と網して勇士命を落と

斯く其日ありし。小栗満重。小次郎。大伴。ひ名武。が。誰。ふ。ま。り。し。く。バ。
あて侍ま。ゆ。け。し。れ。る。み。か。れ。ハ。馬。光。か。き。り。お。く。喜。び。多。く。也。歎。符。る。小。栗。
親子の主。懸。懸。する。食。意。ふ。ん。盛。く。園。の。裡。を。徘徊。その。風。色。を。観。ふ。
酒。余。り。各。各。の。様。の。今。年。の。こ。れ。を。色。は。ま。り。ぬ。れ。た。その。殺。る。ふ。何。よ。譬。へ。ん。
方もな。れ。ふ。周。池。の。岸。辺。に。坐。す。棟。堂。と。入。其。令。及。び。水。の。底。に。蛙。の。音。
う。ら。ふ。折。を。こ。も。る。百。禽。の。これ。は。對。と。響。る。ま。ぬ。世。の中。れ。ま。い。く。此。地。方。に
ある。と。思。は。れ。た。その。折。ら。池。あ。ら。う。く。の。真。さ。も。の。浮。き。出。く。様。び



小栗小次郎
鴉鳩と射て

弓法と
論生

侍従

小栗蒲重

名武盛光

横山幸方

小栗小次郎

小栗巻之三

某よりおき言をのべては氣を接するとも畏し只今の言の酒の
 への飲まりのは心あぢもどるを免めて今一杯ときじめせとアにそ
 小栗親もさうくお云とせりと後悔し是より恥て流ぬは五三ころ
 解くまも酒宴を催したりこれとも横山の前より酒を討後又
 悔ふげもれ両方まで恥を受ければ影渡して何となくふその席を
 退出り足横山小栗お仇せんと相少のころみ発端了斯て真閑及び
 る時篤光小栗お對ひてアと云今日酒宴のまの真閑はと云つ
 かうか付れど女兒めては照天が一曲をばま入んといふもそと女ゆか
 満重はひ令愛の琵琶の振袖うらうらと流る風声ははれとその曲
 とはまのこの是恨いといふはよん幸うと云くといふればは
 さくは這裡へはくつらうのいと奥よりうらうははひ更ちて酒肴を出し

食後なり時篤光の妻侍従女兒照天姫と信ひ不意は二面の琵琶と
 齋らし出でて小栗親子お對ひ邂逅するせまめおぬのめつけあくと
 不意なるとなるなりとまのうらうはへたれは小栗の前刺よりまくと懸懸
 する食後よれるれとのべを照天姫お一曲をアと侍従の微笑して
 女兒が琵琶とよも弾むと云はばまえまのとも侍従がまもちれと
 望まし終ると辞はのともれは命おまじしゆらうの一曲は
 今換一曲お唄ひらるも其声微妙めと人として感動されは小栗満重
 好配遇さるめと頻念に只願照天姫お稱多されは篤光其と云次
 推し此秋こそ宿志とも云らめと言はらして云らるは此席やと

小栗親もさうくお云とせりと後悔し

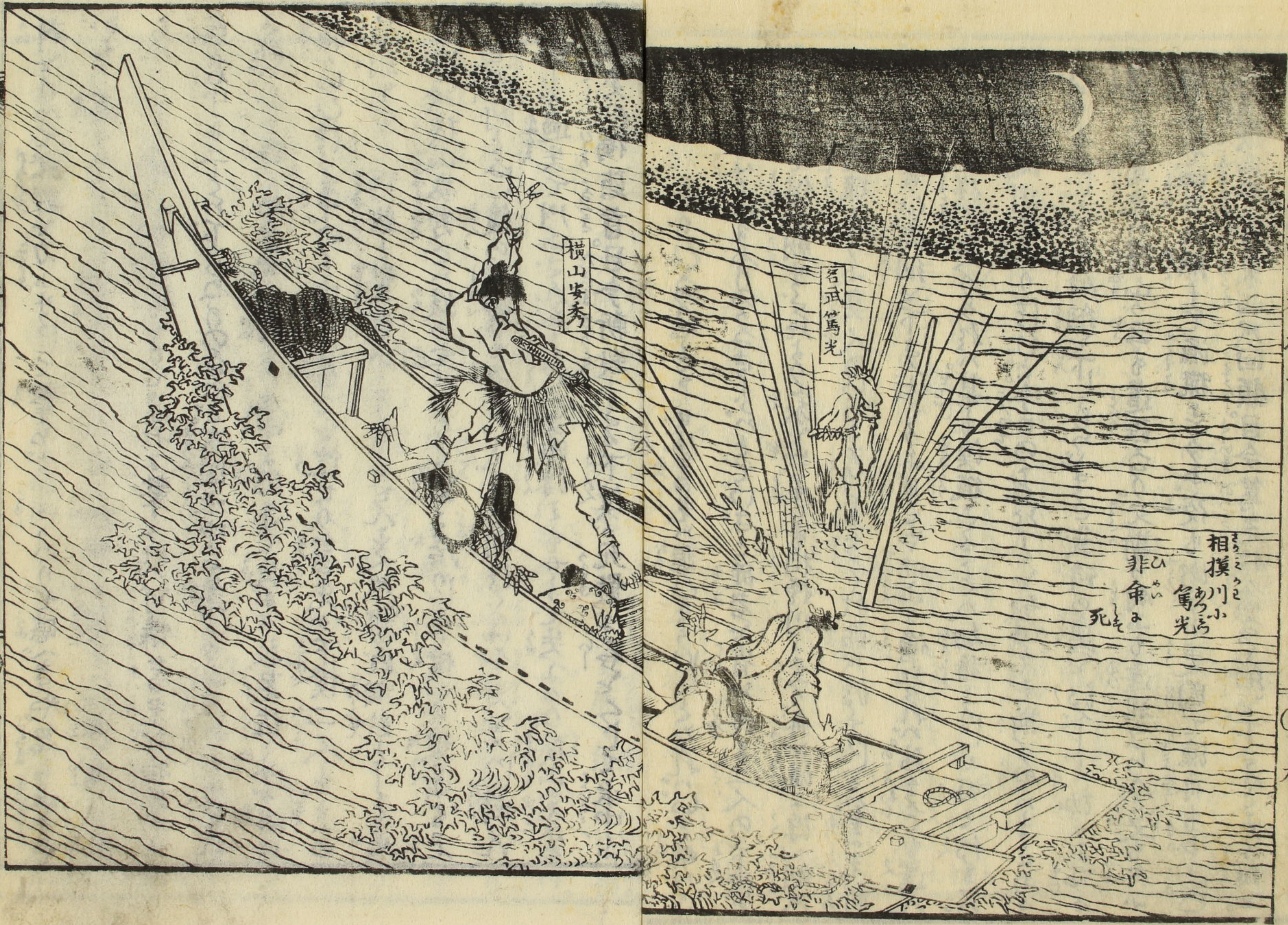
是より恥て流ぬは五三ころ

國へ来りては、其の足下と其の交りたる足骨肉のほど、爾のあは
れ、亦他門されば此交りて子孫おぼへしよ、思ふ足下も令郎
あり、我の女見あり、これより夫婦とせむ、女家永く因次結り入世こと
いふあはれとやと云ふ。満重こよ、むむむむむむと拍てきり、
某そのおめれども足下一人の令愛されば他お嫌し、あまじと云ふら
まひも生きてよりいふお宣、さう不圖幸なり、その内君のいふは
いふおめれとあり、お付従されと云て、さうね、お夫の命と非うぬ、妻なる
いふおめれとあり、お奴家も豫て小次郎どの女婿おうねとあり、今存びに
さうおめれと憂といおむい、さうん、小次郎どのと女見、赤繩と子代、
おあ代のさうね、石の巖とさうん、おあ代、お祈とさうね、と回るとさう、
満重喜ひ、堪へと、小次郎にうら對ひ、我女、室とあり、せんとも、と

まご初弱、うら小且と、又探正、お良兒、さうね、お其、さう、と有けり、
今日不図も、お光夫人、令愛とありて、お汝、お嫁さんと宣、お照天、お姐、お氏と
いふ、お才、お親、お母、お勝、お是、お入、お汝、おい、お高、お運、おめ、おと、お雀、お躍、おと、お喜、おべ、
小次郎も、お父の慈愛の厚、お加、お喜、おびの色、おお、お影、お首、おと、
お居、おり、お光、お夫、お婿、お小、お次、お希、お強、おと、おて、おさ、お彼、お見、お落、おひ、お女、
お見、お照、お天、お娘、おら、おち、お對、お此、お年、お以、おま、お女、お婿、おを、お素、おと、おは、おま、おと、おう、お入、
も、おさ、お心、お若、おく、おの、おは、おさ、お小、お次、お新、おどの、お女、お婿、おと、おさ、お小、お定、
おま、おの、お彼、お人、おこそ、おお、お柄、おとい、お南、お世、お逢、お会、お並、おひ、お花、お才、お貌、お両、お全、お乃、お少、お年、おの、
お才、お花、おの、おい、お既、お今日、お鳥、お射、お多、おく、お弓、お藝、おの、お逢、おと、お知、おれ、お此、お人、
お妻、おと、おの、お女、お御、お后、おと、おり、おし、お同、お幸、おぞ、お今、おより、おは、お小、お次、お郎、おどの、お女、
お夫、おと、おい、お満、お守、お丈、お人、お男、おの、おり、おこれ、おが、お父、おとも、おえ、おと、おり、およく、お孝、お行、お

小栗名武の二人羽白ふくへ上へほどふ我永枚家疑はけるふより今
 知君のほ代められと尚故のくは近習の比入り足もくよ小栗名武
 西支へくれとれこのく世恨と暗さと云と分これよた方人よと横山膝元
 さくめて山は前とる光も恨のこの子の細と誘り我よ方人よとるらば
 里下の恨を時とせとあつも注秀をびさうが這般くくはる
 密談我刻ゆ及び終よ別とて去より不在語下今年もと仲秋の頃
 むひよありたれが相模川の難りの年よりも夥しと種倉中のき残彼下
 ふ漢獵とる人まよりしふ鳥光原と魚獵と好むの癖ありて四村の町は海
 川の厭ま。或ひは釣し。あつは細せしに近日人の同声は我も彼も同行
 ともとまう宿備とるを横山窺ひ知てそれ一日たる先小對ひ近日相模川
 みてよれ獲物あるはした。た。う。み。あ。り。と。れ。は。は。は。と。漁獵せむと存るま。

おや。た。せ。も。ひ。さ。ん。や。と。ヤ。セ。は。る。光。の。想。ひ。ま。う。け。と。か。れ。い。と。疑。げ。
 い。く。も。あ。え。ま。あ。の。う。ま。さ。く。ふ。と。て。口。ご。と。徒。者。を。省。け。俵。も。二。人。の。下。僕。と。
 横山とをばひ朝ま。たより家と出ま。くも相模川に至り舟と流し浮へ細は
 下へ漁獵とるふ実人のいふ差つと多くれ鮎は流りしうを光斜
 るもは喜び尚細と下さんとさるふ日さや西山へ傾れられ。殊も多くも遠入
 とあつと横山さるのたれは某も漁獵とると。勿推よりして好む付まら
 幾回此川へまのはれと今日のどれとを。お。海。え。と。斯。く。射。は。ま。う。こ。の。
 るうもなし。今夢射細と下し。ま。う。ま。う。こ。幾。許。の。奥。を。ほ。ぐ。と。勧。ふ。好。む。
 道とて鳥光ハ横山が云も道理なり。又斯く射も達難うら。と。又。も。舟。ふ。
 棹さして四方に細く漁獵とるふ夜も潮く小更園て漁舟も少。
 比及横山安秀東西回顧。目今鳥光餘念ま。く。細。と。下。さん。と。ま。う。る。楚。と。



横山安秀

名武竹馬光

相撲川
非命死
篤光

山崎光色之

九

楯とりて流脛と力おすして撃つやどふ何うのりて堪へきや。忽ち水中お
かごと流るる。されども鳥光武蔵水練よ熱せし丈夫されば水と遊んで上
らんとす。横山安秀楯とりて連打を撃たれば可憐なる光打物取ら
鎌倉中二と下らぬのされど不図水中お落るる。且敷くお撃たれ
れば公の猛くありまら。終る水中お溺して失はれ足佐く谷の
谷のいひける事。こゝまきこ其つを沈せり。鳥光が下僕二人と主の
最期を着て愕然と驚き。いづれもせんよ。次知るに憫然とく居
りし横山安秀の後の害なりと前居りし下僕と。横山も見
せど両断とす。後の下僕も逃さじとまよと斬けくはを刃とけし。避ん
とせしが過失て川おさんぶとわび落浮ともかて失はる。横山は元と
うち笑ひ獨逸首目今斬殺する。下僕が死骸よ石をくして水中お

投入れ舟中の血が溢ぎ流し又舟と巡りし。鳥光が屍を細りて川揚
已むが衣裳とあや細し。全く溺れしを辨ゆ。一とあて舟と岩はひ。
鳥光が屍を脊よ負ひ鎌倉はして急き。横山が奸計を思む。是より
鎌倉よ還り。奈何とぞ。做らん次編お解と流る。知りまへし。

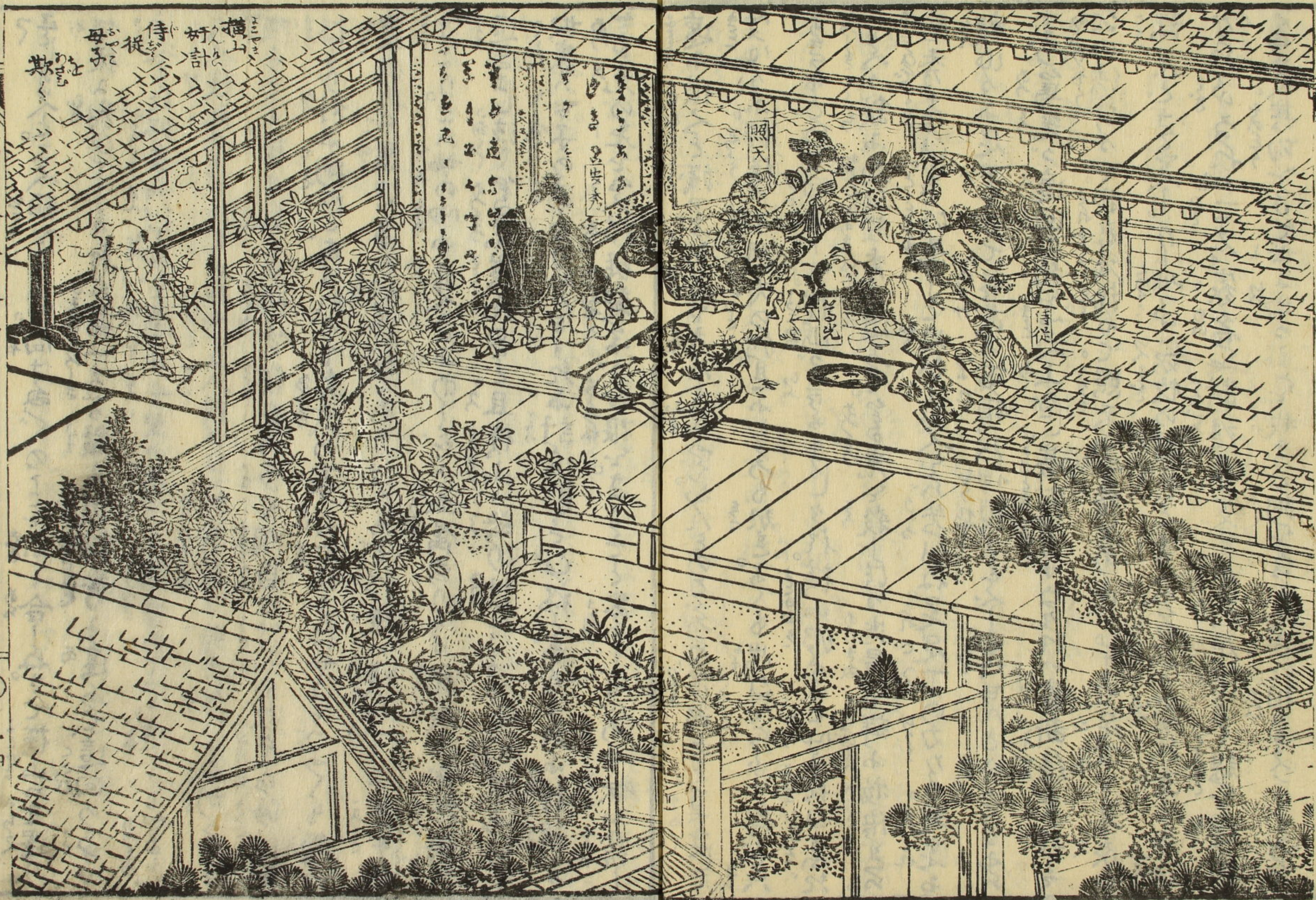
第四編

横山佞計と一色よ謀は
結城実事と家叔お訟ふ

斯く横山安秀乃の鳥光が屍と脊負ひ道と急いで夜のらちお名武が鞍こ
還りまへり。密に裏門お音うへ付従へ夫のゆりれほき。流る。夜も
さぶらしめ待たれて付る。こゝお密う。後門を叩く音のすをれ。胸
もち強き。自ら紙燭して走り出下僕と呼起して。給せと問へし。横山
某あり。鳥光のいづく酒お酔ひぬ。さく。明多へとあるふ。た。横山

の声あれば。それくと門を抜りしその身も門迄まて出でえり。横山安秀
 夫篤光を脊負ひしるが。二人ともひた濡れ湯で居る。着の。湯の
 横山より此まに臥下へとて通る。付従の前も立て夜の。あけりける。処へ
 誘ひて横山舟に篤光をかきおろすと付従の睡寝ひき被さく其傍に
 添て着角さる。肌冷身かまらうて息絶て居ね。此等とる。りも。さく
 しつと寝るま。ひ我夫しつと志のふぞと声のかまら呼叫べと事まねい
 回意は。付従へ尚もせきたちて横山さうら對ひおんこの知らざら
 めし。しつとる縁故ぞ詔りやう縁と同へと安秀うちあられ。時付回意を
 せりしつとあつて涙をらひ。えまへ。経通の篤光とのも某の。湯
 せりて。あふ。今日相模川の漁獵とて彼川の舟と浮人き。近と徘徊
 細下と。一回も空。き。る。は。鬼角とる。に。日。も。さ。る。ん。と。と。れ。ば。今。日。ハ

これめて止まるとさ。ち。う。と。あ。ま。の。獲。物。の。ま。う。う。ふ。心。ひ。う。れ。ま。ひ。て。や。我。練
 を。能。と。更。開。る。ま。て。漁。獵。せ。り。が。後。さ。月。も。勞。れ。酒。も。酔。り。入。り。足。の。踏。正。を
 疎。失。て。川。ま。ん。ぶ。と。あ。ま。ひ。ね。こ。い。う。め。と。驚。き。る。已。ま。も。其。ま。も。あ。ま。花
 入。の。助。け。上。ん。と。せ。り。ご。も。雨。ま。は。ひ。る。月。影。お。物。の。あ。や。め。も。あ。ま。花。ま。よ
 世。延。よ。と。尋。ね。る。う。ら。や。付。後。も。遙。さ。流。の。末。あ。て。辛。う。て。か。ら。ま。ご。の。ひ。ん
 揚。さ。ん。じ。や。奉。ま。き。り。て。甲。斐。も。は。舟。も。残。せ。り。二人の下僕。の。銭。き。ま。の。
 湯。接。く。湯。ま。ま。と。も。騒。ふ。無。し。言。え。と。の。某。が。衣服。刀。と。奪。ひ。ま。り。何。方
 と。も。お。ろ。逃。失。り。我。一。舟。も。居。ま。ら。ず。篤。光。と。の。あ。ま。も。溺。ら。し。死。な。を
 甲。斐。ま。ま。と。も。さ。ま。の。恨。ま。の。あ。ん。ど。れ。と。斯。塔。智。と。い。ひ。且。な。ま。と。年。以。才。と。ま。あ。り
 悪。人。の。い。う。で。疎。畧。と。そ。ん。ど。ん。力。の。及。ん。限。な。そ。う。は。れ。れ。も。命。運。乃。
 つ。る。怨。う。詮。と。ん。と。我。姉。上。の。ア。と。れ。い。う。ふ。ま。ん。悟。極。し。り。と。に。お。ん。く



横山 好計 侍 從 母子 歎

小栗卷之二

小栗卷之二

〇十四

〇十三

して沙汰さじと持胡を還し俄に伊予の君の元へ入るや
 名武鳥光奉相持川小漢獵して溺死せ侍血属結城村朝
 中へ入る光私命を失ふと其不忠のあへきやなり此科願を
 没収し妻子を遺放するふ及べり。されば名武も名家の末なる小且の奮
 功のりなれば僅かそ名録をりともまじらる。八州の諸大名君のほ
 仁徳を感し東園まじく昇平をうべと笑へむげも君を侮とも宣ね
 前ふは例お付け一及詮秀進をまじりたる光君の禄食
 まじら其身を故地中川狩に與ふの沈しは不忠の罪天翁免し
 めるぞ非業の死を遂はるうん。さるりの家をまじり人となつても
 ゆるむと執事のやさうとを命にせん其持はれは似れ我計か
 昔のり今も光男ふう女子一人の年いも幼稚は彼女子成長

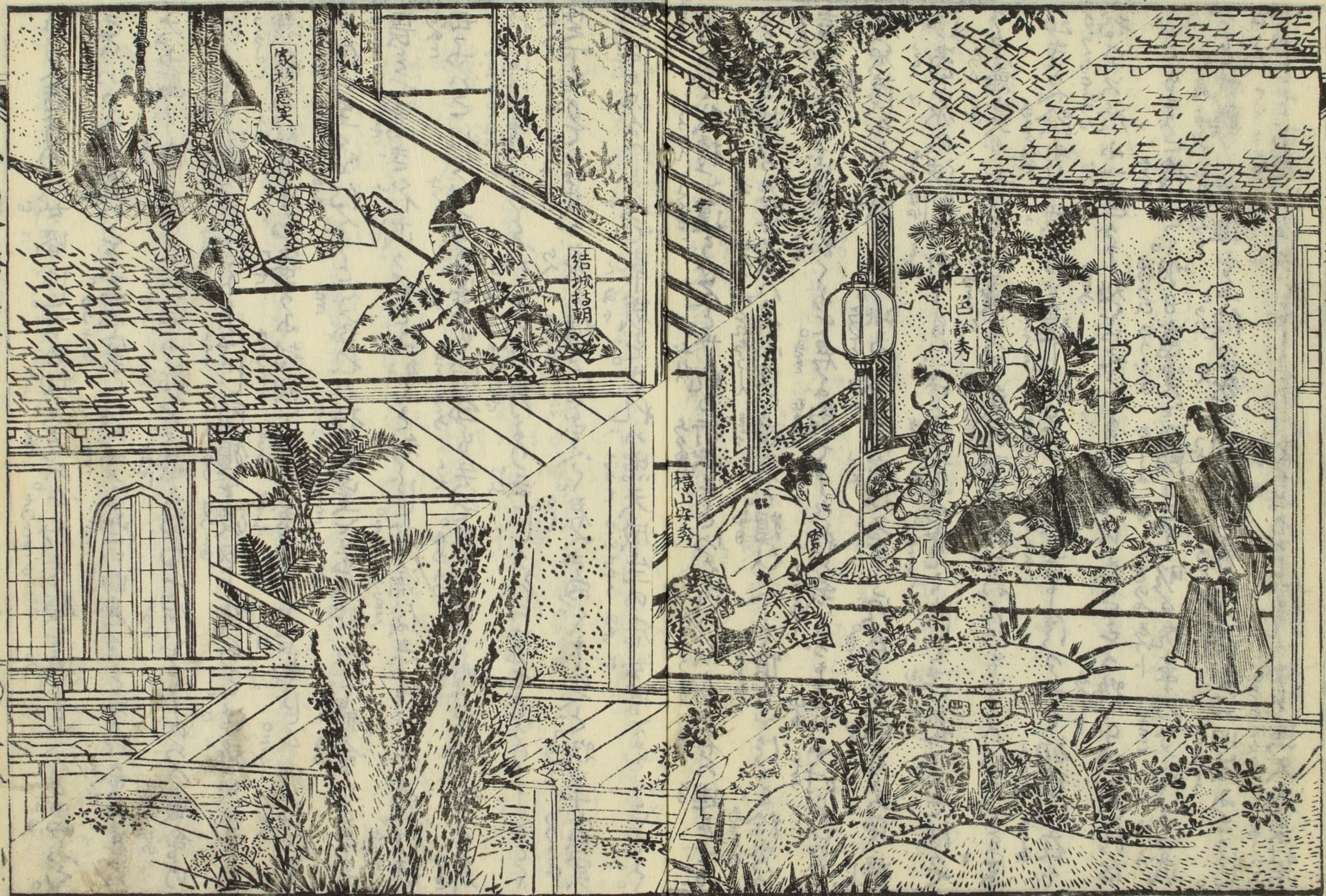
然るべき女婿を迎ふる事と鳥光の妻の身横山女秀と名武が家の後人
 とあつて両全の儀ともやせん。その奈何とされ横山安秀はさる罪も
 ゆるむと後者のゆふ前年満兼公の山をめぐりし彼の罪をまじ
 したるやう人も知らる。再々そのまじり罪ある名武が家をまじり人とな
 政道正しからばとていへ。さるりて横山と名武が後見とせむ。横山が
 妾罪のやども知らし。名武が舊好とも忘れぬ。仁義のやとつて
 ゆるむ。さるりやと。憚りぬ。村氏公年好ふとて。せむもまじり
 詮秀が。と。処と。家抄憲実を對りせむ。詮秀が。と。と。と。
 執事のゆめ。存めと。宣り。憲実。正し。横山。前年。武。國。の。一。領。を。治。り。民。を。治。り。百。姓。の。嘆。を。止。め。し。ま。す。人。の。諸。士。を。對。し。て。其。の。ゆ。め。を。止。ま。す。と。後。に。その。所。帯。を。没。収。し

多しき。この誰にもよく知はれぬ。彼をりて名武か後。是は所へ乃
 出仕。まじき狂。あつせば。諸士の公背。いふる不思議。出まふ人と
 少へ。まじき。持氏公。例。おほつる。年老る人。ふ對りせ。まひ我。年。勿。推。て
 横山。勳。氣。勢。り。對。の。ゆ。おほつる。も。知。れ。執。る。が。や。さ。処。と。一。又。か
 中。の。所。こ。と。實。ゆ。と。回。應。せ。詮。秀。教。を。と。ま。て。も。た。れ。の。ま。も。も。の
 附。の。こ。と。ま。よ。く。知。れ。い。て。偽。も。り。は。ま。き。人。く。執。る。の。権。威。を。懼。し。斯。と
 中。と。と。お。ほ。ゆ。り。趙。高。が。馬。ど。り。て。鹿。の。ひ。ひ。び。き。じ。め。ま。と。や。と。め。か。り
 き。ん。て。述。る。ふ。そ。憲。實。これ。と。ま。て。心。中。憤。り。懷。き。詮。秀。我。を。り。て。趙。高。お
 比。不。臣。の。名。を。負。せ。ん。と。と。る。で。う。奇。怪。と。既。其。を。れ。過。言。は。れ。ん。と
 せ。ら。ま。と。志。し。今。此。勉。め。あ。わ。て。志。角。と。争。ら。君。勿。推。お。じ。ま。せ。ん。と。は。ま。と
 憚。ら。と。我。推。と。違。う。せ。ん。と。サ。レ。の。行。状。を。い。れ。れ。趙。高。が。名。を。逃。ま。し。も
 ず。梁。比。異。の。名。を。負。入。是。忠。臣。の。道。と。想。ひ。入。て。憤。り。を。は。し。詮。秀。が
 言。を。い。や。う。と。は。う。が。如。く。わ。て。君。を。對。て。す。ま。れ。我。く。が。日。か。計。ら。ひ。い。つ。ぶ
 君。の。茂。也。と。る。お。れ。め。り。此。の。今。日。に。定。む。る。君。を。く。は。し。と。る。疑
 法。當。家。の。法。制。を。乱。し。ひ。ま。と。は。へ。上。の。實。と。して。法。を。そ。は。ま。と
 する。憲。實。か。ら。う。や。ひ。優。美。の。良。名。を。と。感。せ。め。り。の。も。な。り。け。り。と。ま。あ
 じ。き。久。詮。秀。ハ。我。を。違。し。尚。ま。と。と。洗。言。し。は。る。あ。そ。勿。推。お。在。と
 持。氏。公。終。一。色。が。り。知。れ。足。と。し。ま。ひ。お。が。ら。も。ま。と。執。る。の。い。は。は。は
 こ。と。も。ま。と。捨。つ。て。明日。憲。實。は。所。よ。る。一。時。執。事。の。さ。へ。は。る。名。武
 が。こ。我。熟。く。思。惟。と。彼。の。家。の。嗣。と。男。子。の。目。が。旧。法。あ。ま。り。し
 一。回。ハ。そ。本。領。を。没。収。と。す。その。れ。名。家。の。こ。な。れ。ば。女。兒。照。天。成。長。は。后

多しき。この誰にもよく知はれぬ。彼をりて名武か後。是は所へ乃
 出仕。まじき狂。あつせば。諸士の公背。いふる不思議。出まふ人と
 少へ。まじき。持氏公。例。おほつる。年老る人。ふ對りせ。まひ我。年。勿。推。て
 横山。勳。氣。勢。り。對。の。ゆ。おほつる。も。知。れ。執。る。が。や。さ。処。と。一。又。か
 中。の。所。こ。と。實。ゆ。と。回。應。せ。詮。秀。教。を。と。ま。て。も。た。れ。の。ま。も。も。の
 附。の。こ。と。ま。よ。く。知。れ。い。て。偽。も。り。は。ま。き。人。く。執。る。の。権。威。を。懼。し。斯。と
 中。と。と。お。ほ。ゆ。り。趙。高。が。馬。ど。り。て。鹿。の。ひ。ひ。び。き。じ。め。ま。と。や。と。め。か。り
 き。ん。て。述。る。ふ。そ。憲。實。これ。と。ま。て。心。中。憤。り。懷。き。詮。秀。我。を。り。て。趙。高。お
 比。不。臣。の。名。を。負。せ。ん。と。と。る。で。う。奇。怪。と。既。其。を。れ。過。言。は。れ。ん。と
 せ。ら。ま。と。志。し。今。此。勉。め。あ。わ。て。志。角。と。争。ら。君。勿。推。お。じ。ま。せ。ん。と。は。ま。と
 憚。ら。と。我。推。と。違。う。せ。ん。と。サ。レ。の。行。状。を。い。れ。れ。趙。高。が。名。を。逃。ま。し。も
 ず。梁。比。異。の。名。を。負。入。是。忠。臣。の。道。と。想。ひ。入。て。憤。り。を。は。し。詮。秀。が
 言。を。い。や。う。と。は。う。が。如。く。わ。て。君。を。對。て。す。ま。れ。我。く。が。日。か。計。ら。ひ。い。つ。ぶ
 君。の。茂。也。と。る。お。れ。め。り。此。の。今。日。に。定。む。る。君。を。く。は。し。と。る。疑
 法。當。家。の。法。制。を。乱。し。ひ。ま。と。は。へ。上。の。實。と。して。法。を。そ。は。ま。と
 する。憲。實。か。ら。う。や。ひ。優。美。の。良。名。を。と。感。せ。め。り。の。も。な。り。け。り。と。ま。あ
 じ。き。久。詮。秀。ハ。我。を。違。し。尚。ま。と。と。洗。言。し。は。る。あ。そ。勿。推。お。在。と
 持。氏。公。終。一。色。が。り。知。れ。足。と。し。ま。ひ。お。が。ら。も。ま。と。執。る。の。い。は。は。は
 こ。と。も。ま。と。捨。つ。て。明日。憲。實。は。所。よ。る。一。時。執。事。の。さ。へ。は。る。名。武
 が。こ。我。熟。く。思。惟。と。彼。の。家。の。嗣。と。男。子。の。目。が。旧。法。あ。ま。り。し
 一。回。ハ。そ。本。領。を。没。収。と。す。その。れ。名。家。の。こ。な。れ。ば。女。兒。照。天。成。長。は。后

賢者の
眼を
明かに
する
朝の
白
雲

秋の
夜
の
静けさ
を
思
ふ



小栗卷之二

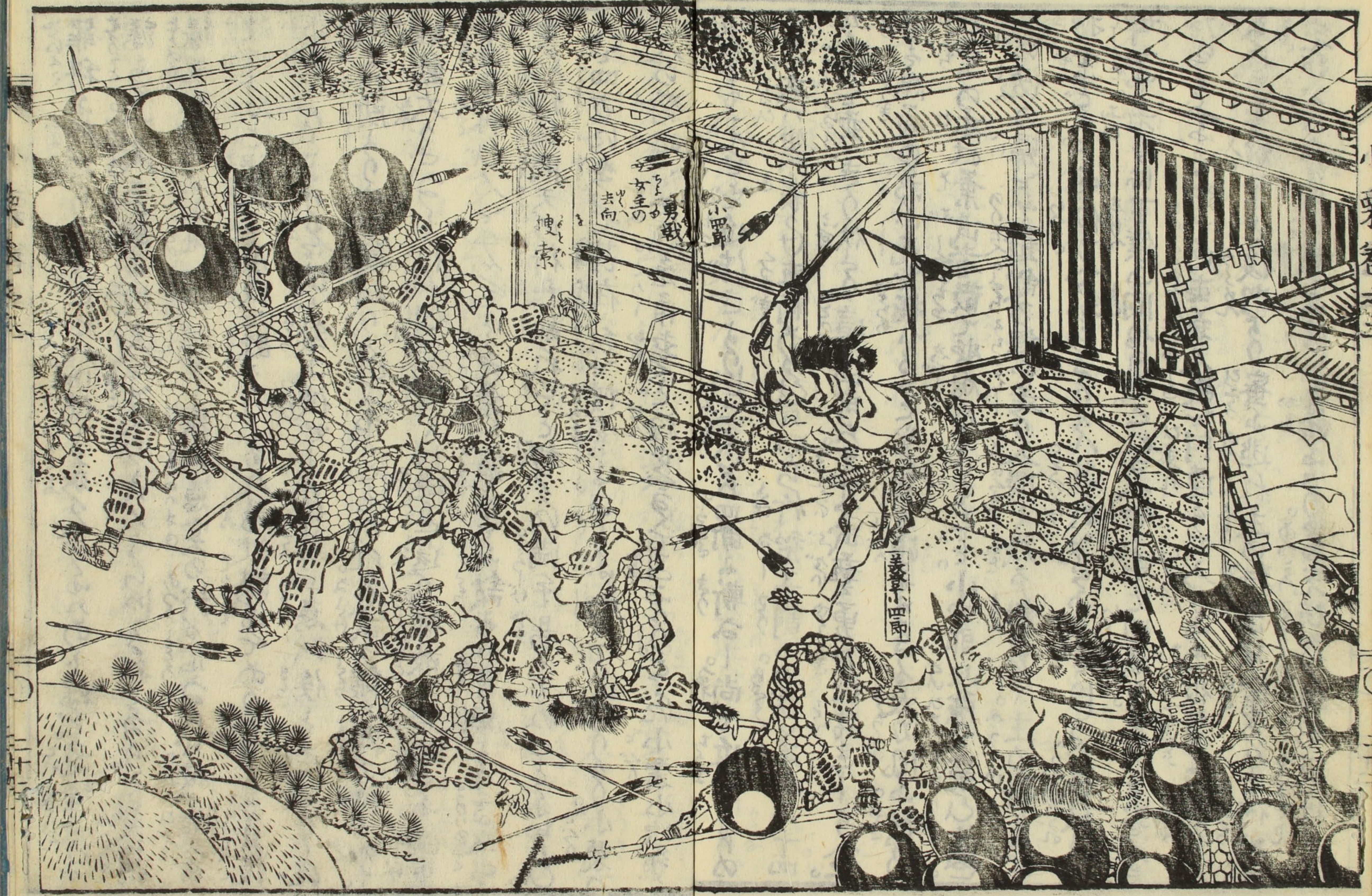
十七

さん人きりの次女婿とし。一ツの功をまわす。付本願を返すふへと思ふ。こゝらつちと宜つとふ。憲実これ次女ふ此の曲且つること。命なむ。大に感し。命まことの法に秘けり。某かあつて何とやら。いん厳命のほどをさるる。妻さふり。所領を没収し。ゆめと法所。我館おぼり。まづ蜜うお持朝と返れ命の旨を告知し。痛使じて。使の至るを待て。と父おれば。持朝望と失ひ。厳命なむ。畏きて急ぎ名武うめとめかくと知り。其痛使志あへとめ。行従母ふこれと。母より。まも消ゆも失て。後幻なく。嘆ろり。これより。前。横山安秀がめとへ。一色詮秀より云に。これ。豫てをくり。下として。名武が家の後え。君さあぐ。執事憲実のさ。ゆるに。事成とされ。照天成生の后女婿とめ。

名武が家断絶ま。きふ。か。日。使至る。名武が。敵。後の謀れ。此。計。と。り。後。此。告。心。裡。想。免。角。付。從。母。子。欺。き。何。方。へ。も。俱。し。て。退。き。我。と。り。て。照。天。の。女。婿。と。し。本。領。安。堵。と。さ。る。名。武。が。家。と。公。の。ま。づ。夫。より。今。此。家。お。貯。あ。る。金。銀。財。宝。と。奪。へ。五。三。年。が。け。ら。栄。利。を。做。足。る。と。喜。ぶ。処。お。只。今。持。朝。の。告。お。よ。り。付。從。親。子。が。嘆。と。着。て。信。中。う。ら。お。り。ら。多。に。法。慰。ひ。折。ら。り。小。栗。満。重。が。り。と。よ。り。消。息。し。て。云。こ。一。は。ら。ら。這。回。篤。光。と。の。不。回。の。寂。切。と。逐。ま。る。ば。兼。り。て。誓。入。て。め。人。の。以。實。さ。と。と。察。し。と。り。ぬ。ま。と。中。ら。ん。今。日。法。所。より。使。あり。と。兼。り。り。奉。り。ゆ。し。ゆ。ら。ぬ。照。天。と。の。小。次。郎。妻。心。何。う。若。か。ん。這。様。

此よりいへるも角もよむ討らひすおふとせと。いと頼母くまへ
 けりもぞ付従ふこの書巻とて小栗が志氣のやと喜び。ゆづら
 小栗がりといふ行人とありと横山うち受てりりて。いづれも
 告しといふまゝ。あや名武の名家のことなれ。一旦を法よみて断
 せといふと照天生長の后。あうんき人と女婿と。二ツの功を
 安堵させ入し。この命のは。君ももゆき。お母と旨めり。照天
 小次郎の娘さぶ君のほふ。差のさう名武の家を。許る再真さ
 ことにふは。はきまのら。小次郎のよれ。女婿め。のれ。兄さ。か
 一子。且。所。給事。ま。い。い。ふ。え。と。も。名。武。の。家。を。嗣。と。ま。ま。し。
 ず。な。れ。縁。ふ。は。ま。が。て。永。く。家。名。を。た。と。忠。孝。と。い。は。し。此
 道理と舟へて。次郎と照天と。許家の約を。入さる。人。は。ま。あ

りと。理。と。ま。て。説。く。う。ふ。さ。さ。う。女。の。の。ま。ら。う。小。横。山。が。欺。き。さ。う。と。ぞ
 とも露むうも知らば。て。理。の。通。物。は。な。ま。り。照。天。姫。よ。う。ち。對。ひ。奉。
 既。よ。今。日。に。及。び。い。う。も。も。做。ま。す。し。と。家。を。再。真。さ。る。と。孝。の
 道。あり。よ。し。く。其。心。は。深。ま。り。し。と。は。あ。り。照。天。姫。へ。初。雅。と。い。も。
 その志氣。一回。許。家。世。小。次。郎。と。縁。を。訂。ん。と。す。り。も。師。沈。ま。て
 泣。き。け。る。が。潮。あり。て。り。り。の。生。平。の。父。母。の。宣。り。と。忠。臣。の。二。君。は。は。と。
 貞。婦。の。両。ま。よ。ん。と。い。ふ。本。文。の。り。汝。と。小。次。郎。は。許。娘。と。且。は。足。則
 小。次。郎。の。妻。ん。た。と。い。う。る。奉。め。り。も。他。人。を。り。て。ま。と。ま。せ。と。涙。も
 教訓。の。ひ。き。其。の。言。の。な。ま。み。忘。れ。ま。も。ゆ。り。ぬ。お。家。の。み。と。い
 い。ひ。ら。が。ら。貞。標。と。あ。り。婿。婦。と。世。に。非。ら。う。哀。さ。う。外。は。術。の。付。く。と。
 や。と。か。ま。は。説。け。く。嘆。き。け。れ。母。の。これ。と。は。悲。し。く。あ。ら。れ。賢。き。我。子。や。と。



女
主
の
勇
戦
去
向

捜
索

美
津
小
四
郎

小
泉
卷
二

大
人

十

なるにふれ。爾るふ者浪素賤きりのあるふ。且貪欲なる性あり。俄に
 我身人よ致られはるふつけ驕の公出見小次郎あらまじ。うはらふ子
 万ふ代こそ小栗が世嗣とまゝんばらめと。これより小次郎と号んざらふ
 こそ方見えたり。かゝるにやふ時、小次郎がことと満重ふ後とつらふ。
 満重万の代が愛中暗まされ。浸潤の罅層受の懇終、再行らまて。
 小次郎を悪むとゆとめ。ゆとめ。昔ふの似どなりゆきぬ。されど
 小次郎の孝心流きりのなれ。父の疎むとん。こゝ我心の暗と。尚や
 まふ。孝がそ。これ爾るふ今年。寛永廿二年。関東の亦ふおわら。
 群盜蜂起。賦税と侵奪。民財を奪ふは。濃谷之河内。御の藪と
 ひくが。後領村氏と。執事家校と。評議の門。在。鎌倉の
 諸大名を。領必下。速に賦徒退治と。嚴命のり。たれやとふ。

各領皆。てこの。國へ下り。は。小栗満重も。西原のら。群盜あるふ
 よの。速に走ら。人き。所ふ。尚。付。而。労働。あ。か。て。歩。行。ふ。不。能。の。ま。を。男。兒
 小次郎と。代官として。さ。下。え。んと。奉。の。由。と。ま。へ。の。げ。に。速。に。走。ら。ん。と。
 蒙りし。う。さ。う。下。ま。さ。と。想。ふ。小次郎。今年。十七。あり。れ。と。未。終。用
 め。り。て。男。お。ま。ら。縁。が。形。て。人。の。用。ひ。も。い。ら。ぬ。と。俄。に。元。服。は。名。を。助。重
 と。名。を。さ。し。け。り。此。府。小次郎。父。の。代官。せ。し。り。て。これ。より。世。の。人。小次郎
 次。小栗判官。代。助。重。と。い。ひ。ら。る。を。り。形。て。助。重。の。父。の。命。と。稟。て。赤。子
 老。儒。教。を。入。る。俱。一。領。國。常。陸。の。主。走。下。り。ぬ。

小栗外傳卷之二



